

2021 年度 日本語学習支援事業実施報告

Dagvadorj Adiyanyam

閔 琬新

東北大学大学院教育学研究科

1. 日本語学習支援事業の概要

本事業は、教育学研究科の外国人留学生を対象に、研究活動を行う上での実用性の高い日本語能力向上の支援を目指し、2014 年度から実施されたものである。本事業には二つの活動内容が含まれている。一つは、講義形式の日本語授業である。これは、長年地域社会で日本語ボランティアをしているサポーターが日本語の文法および読解の授業を行うものである。もう一つは、対面形式による日本語添削であり、サポーターが留学生と 1 対 1 で対面しながら発表資料、レポートや論文などの添削を行うものである。

しかし、昨年度につづいて今年度も、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、対面形式での実施が困難であった。そのため、年度初めの 4 月 27 日に先端教育研究実践センター長、副センター長、センタースタッフ 2 名、日本語サポート会の代表 1 名、サポーター 6 名が参加し、顔合わせ兼打ち合わせを開き、昨年度同様、以下の 5 つの方法について検討した。

- (1) グーグルドライブを使用したやり取り
- (2) メールでのやり取り
- (3) 郵送でのやり取り
- (4) パソコンを使ったオンライン上でのやり取り (Google Meet 及び Zoom を使用)
- (5) パーテーションを使用した対面でのやり取り

話し合いの結果、前期では、昨年と同じく「(1) グーグルドライブでのやり取り」と「(4) パソコンを使ったオンライン上でのやり取り」を併用して行い、講義形式の日本語授業を停止し、日本語の添削を中心に事業を実施していくことが決まった。後期では、国内の新型コロナウイルス感染症の状況と、それに伴う各種政策および学生・教員・サポーターの予防接種の進捗状況を総合的に判断し、日本語学習支援事業の実施方法を臨機応変に決めていくこととした。しかしながら、予防接種は順調に進んだものの、後期に入っても新型コロナウイルス感染症の変移株等によって国内の感染状況が収まらない実態であったため、日本語学習支援事業は引き続き上記 2 つの方法で実施した。

その際、(1) と (2) を合わせたメールでのやり取りをプログラム①、(4) のパソコンを使ったオンライン上でのやり取りをプログラム②とし、外国人留学生 (以下、学生という) メーリングリストへの一斉メールで案内した。

プログラム①の内容

- 学生に金曜日の午前中までに、添削してほしいファイルを担当者まで送るように伝える。
- サポーターの方々のみ、毎週金曜日 13 時 10 分に大学に集まってもらう。
- 学生から送られてきたファイルを担当者が印刷し、サポーターの方々に手渡す。
- 日本語をその場で直してもらい、添削が終了したファイルを担当者が預かる。
- 担当者が預かったファイルをスキャンし、その日のうちに学生にメールで返送する。

プログラム②の内容

- 学生には金曜日の午前中までに、オンライン上で一緒に添削をしたいファイルを担当者まで送ってもらう。
- 添削する資料を受け取り次第、Google Meet もしくは Zoom ミーティングの URL を学生に送る。
- 当日はパソコン、ヘッドホン、フェイスシールド、消毒グッズを教室及びオンラインやりとりができる部屋に準備しておく。
- サポーターの方々のみ、毎週金曜日 13 時 10 分に大学に集まってもらう。
- 13 時 10 分から 13 時 40 分の間にサポーターにファイルを確認してもらい、13 時 40 分から学生とやり取りをしながら日本語の添削を進めてもらう。



プログラム① メールでのやりとりの様子



プログラム② パソコンを使ったオンラインやり取りの様子

留学生への説明会の段階で、入学したものの日本へ入国できず、いまだに中国に在住している研究生（学部研究生、大学院研究生）が何人もいることが分かった。年度初めにはプログラム①で昨年と同じくグーグルドライブを使うことを予定していたが、このような事情の学生とやり取りをスムーズにするため本年度の添削文章の送受信はメールを中心に行うこととした。また同様な理由で、オンラインでのやりとりにも Zoom の利用を中心とした。

2. 2021 年度の実施状況

今年度は、例年通り 5 月上旬に学生への説明会（オンライン）を開き、その次の週からプログラム

を開始することができた。2021年度のプログラム実施状況は表1の通りである。2021年5月から2022年1月まで、計27回実施した。原則として毎週金曜日の13:10～16:00を日本語学習支援事業の実施時間としていた。

プログラム開催1週間前を目途に学生全員に案内メールを送信し、参加希望者を募った。開催する週の水曜日までに参加の希望を出し、金曜日の朝9時までに添削希望のファイルを担当者へ送るよう伝えた。

新型コロナウイルス感染予防対策としては、パーティションやフェイスシールドの利用、使用する教室の換気、使用する機器類、机、いす、ドアノブ、照明及びエアコン・換気扇のスイッチなどの消毒、参加者の検温（開始前後2回）などを行った。

表1 2021年度日本語学習支援プログラムの実施状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
1日	木	土	火	木	夏季休業		金	月	水	土	春季休業			
2日				金⑧										
3日										金⑯				
4日			金④											
5日									【休】					
6日														追加①
7日		説明会												金⑳
8日														
9日				金⑨										
10日													金⑱	
11日			金⑤											
12日										金⑭				
13日														
14日		金①												金㉒
15日									説明会					
16日				金⑩										
17日													金⑲	
18日			金⑥											追加②
19日										金⑮				追加③
20日														
21日		金②												金㉓
22日									金⑫					
23日				【休】										
24日													金⑳	
25日			金⑦											
26日										金⑮				
27日														
28日		金③												金㉔
29日									金⑬					
30日				金⑪										
31日														

※上記【休】と記している日は「令和3年度教育学部・教育学研究科学年歴」による祝日等の休業日。

プログラムに参加する学生と日本語サポーターが直接やり取りをすることができないために、彼らを仲介する担当者の作業負担が大きくなったことから大学院生2名(留学生)をAA(アドミニストラティブ アシスタント)として採用し、プログラム前後の事務作業、教室の準備作業(換気・消毒作業など)を手伝ってもらった。これら2名のAAは執筆した論文等を添削に出しながら、AAとしてプログラムの実施に貢献し、サポートする側としても活躍した。

3. 2021年度の参加状況

2021年度のプログラムへの参加状況を表2にまとめた。

表2 2021年度日本語学習支援プログラムへの参加状況

回数	実施日	参加者数	プログラム別の参加者数 (留学生)		サポーター数	ファイルの種類, ページ数	
			プログラム①	プログラム②		ワード	スライド
			第1回	5月14日		6	6
第2回	5月21日	5	4	1	6	9	11
第3回	5月28日	4	3	1	6	8	
第4回	6月4日	5	5	0	6	24	
第5回	6月11日	4	4	0	4	32	
第6回	6月18日	3	3	0	3	20	
第7回	6月25日	3	3	0	6	12	
第8回	7月2日	3	3	0	6	14	
第9回	7月9日	1	1	0	3	12	
第10回	7月16日	3	3	0	6	31	
第11回	7月30日	3	3	0	5	20	25
第12回	10月22日	4	3	1	6	22	
第13回	10月29日	4	2	2	5	26	
第14回	11月12日	5	5	0	5	35	
第15回	11月19日	5	5	0	5	25	
第16回	11月26日	4	4	0	6	19	14
第17回	12月3日	4	3	1	5	40	34
第18回	12月10日	3	3	0	6	53	
第19回	12月17日	5	5	0	5	14	
第20回	12月24日	6	6	0	7	44	
追加1	1月6日	5	5	0	5	67	
第21回	1月7日	2	1	1	5	71	
第22回	1月14日	6	5	1	5	83	
追加2	1月18日	1	1	0	3	105	
追加3	1月19日	1	1	0	2	55	
第23回	1月21日	8	6	2	5	53	
第24回	1月28日	5	5	0	6	60	
計27回		108名	98名	10名		981ページ	84ページ

2021 年度、日本語学習支援プログラムに参加した学生は 26 名であり、うち他研究科に所属する学生が 2 名いた。在籍課程の内訳は入学予定者 1 名、学部研究生 7 名、大学院研究生 1 名、博士課程前期 14 名 (M1 : 8 名 ; M2 : 6 名)、博士課程後期の学生が 3 名である。追加 3 回のプログラムを含め全 27 回のプログラムに延べ 108 人の学生が参加した。

5 月から通常通りに開始できたこともあり (2020 年度の開始時期は 10 月)、参加者数及び添削した文章の量は 2020 年度より大幅に増加した。

参加頻度は、学部研究生及び博士課程後期の学生が多かった。学部研究生の半数以上が 4 回以上、最も多い人では 13 回参加している。研究生 (大学院研究生 1 名を含む) の場合は大学院入学試験で課せられる小論文執筆能力の向上を目指してメールでのやりとりであるプログラム①に、同じく大学院入学試験に必要な面接試験の準備をするため、オンラインでのやりとりであるプログラム②に参加する傾向がみられた。

博士課程後期の参加者は発表資料、投稿論文、特定研究論文など、ページ数がやや多い文章の添削依頼を目的として複数回の参加となる傾向が見られた。

博士課程前期の参加者では課題研究論文、修士論文などの日本語添削を目的に 1 回~2 回のみ参加した学生が多かった。なお、課題研究論文、修士論文の提出締め切り日の直前に、100 ページを超える文章の添削依頼のケースが数回あり、これに対応するため、1 月には、当初のスケジュールになかった追加プログラムを 3 回実施した。

4. 2020 年度で残された課題への取り組み

日本語学習支援プログラムは 2021 年度も 2020 年度と同様に、新型コロナウイルス感染の拡大防止のため、対面形式の代わりにメールまたはオンラインでのやり取りの形式で実施した。2020 年度の実施で示された課題の解決策として、以下の 3 点の取り組みを行った。

- 1) メールでのやり取りでは、サポーターが文章を添削する際に、執筆者の意図を把握できないことがあり、学生もサポーターの添削意見・コメントを十分理解できないことがたびたび見られた。そのため、担当者にはコーディネーターとしての役割が求められ、文章を添削する際に、担当者がサポーターと討論して、学生の意図を伝える努力をした上で添削を進めた。そして、添削した文章を学生に返送する際にも、担当者はサポーターのコメントを整理し、要点をまとめた上で学生に伝えるようにした。
- 2) 留学生とサポーターの意思疎通を図るために、文章を添削する前に、担当者はサポーターから特にフィードバックしてほしいことを学生に提示してもらうことにした。また、添削後に、担当者が日本語サポーターのコメントを学生に伝える際に、メールに加えて、対面での説明も数回実施した。
- 3) 新型コロナウイルス感染症の影響で未だに入国できない学部・大学院研究生に対して、毎週金曜日の夕方送信する案内メールの他に、翌週の水曜日に学生の SNS グループへリマインダーを送信した。留学生からの問い合わせにも必要に応じて SNS で対応した。

5. 今後の課題

今年度の経験に基づき、以下 3 つの改善策を提案する。

1) オンラインの活用の強化

2020 年から新型コロナ禍が続いており、来年度も収束が望めないような状況が続くならば日本語学習支援プログラムにおいてはオンラインでのやりとりを活用したプログラムの継続が不可欠である。しかし、今年度のオンラインでのやり取りには、パソコンの操作に慣れないサポーターたちが多少の緊張感を示し、また学生が言語能力の不安からうまく発話できなかったこともあった。したがって、サポーターと学生が気軽に参加できるオンライン学習の場を整備していくことが必要となる。また、「て」「に」「を」「は」「が」の助詞の使い方、自動詞と他動詞の使い分け、書き言葉と話し言葉の使い分けなど学生に共通する困難を解決するための検討も重要である。文章の添削だけではなく、日本語の授業をオンラインで再開することが上記課題の解決策の一つとして考えられる。

2) 次回のプログラムで添削する文章量の把握

1 月には、卒業論文、修士論文、課題研究論文、特定研究論文の提出締め切りが近づくと、添削する文章の量が普段より大幅に増加した。今年度はこれに対応する形で 3 回の追加プログラムを実施した。今後の課題の一つとして、次回のプログラムで添削する文章の量を事前に把握し、サポーターの負担が急に増加しないよう調整していくことが必要である。

3) 学生の日本語学習への支援：ピア・レスポンス

学生の日本語学習を支援することが本プログラムの重要な目的であるため、作文教育によく使われるピア・レスポンス活動を導入することを検討したい。ピア・レスポンスは学生同士がお互いの作文について「読み手」と「書き手」の立場を交替しながら検討し合う活動であり、学生の自己訂正能力と協働学習能力の促進に効果が期待できるとされている。具体的な実施方法の例として、以下のような方法が考えられる。学生 2 名 (A、B) と日本語サポーター 1 名 (C) が 1 つのグループになって文章を添削する。前半では、学生 A と B が互いの作文を添削し、日本語支援サポーター C が A、B の文章を添削する。後半では、A と B の文章に対して、学生 A、B とサポーター C が 3 人で一緒に検討しながら、添削を行う。

6. 日本語サポーターからのコメント：日本語学習支援事業に参加して

日本語サポート会の代表 氏家洋子氏より日本語学習支援事業の発足、あり方と今後について綴った貴重な寄稿をいただいた。また、サポーターの方々よりコメントをいただいた。以下に紹介する。今年度も前年度に続いて、例年とは全く異なる方法での実施となり、サポーターの方々には多くのご負担をおかけしたと思う。にもかかわらず、サポーターの方々は、新しい実施方法を前向きに受け入れ、日本語学習支援事業担当スタッフと留学生を支えてくださった。記して心より感謝を申し上げたい。

代表 氏家 洋子 氏

「日本語サポート会」活動のあらまし

—発足の頃—

2014 年 11 月第 1 回目の「日本語サポート会」が開催されました。教育学研究科助教の朴賢淑先生の熱意ある呼びかけがきっかけとなり実現したものです。当日は正確な数は記憶にありませんが文、教育学部に所属する大学院生の皆さんが国籍、研究室を超えて参加してくれ、サポート会の方々にも年齢、性別を超えてご参集いただきました。研究棟の窓から見える秋の風景が美しかったのを覚えています。NPO として日本語支援に関わる私はその後の活動にひそかな手応えを感じていました。

—発足までの動き—

大学側の呼びかけと研究に日本語を必要とする学生諸氏のお役に立ちたいという市民の気持ちが形になった瞬間でもありましたが市民ボランティアが結束して活動を維持していくには、その活動の目的と方策が明確に会員にシェアされていなければならない、単に善意の集まりだけでは成立しません。

サポート会が始動するまでに準備期間（今にして思えば）が必要でした。1989 年私は既に「学生とその家族のための日本語教育」講座を立ちあげ、東北大学国際交流会館や市民センターで外国人のための日本語教育に携わっていました。当時は各国から家族ぐるみで留学してくるケースが多く、東北大学国際交流会館ロビーにいくといつも日本人ボランティアが外国人に囲まれるといった光景がみられました。ニューカマーとして仙台に住む皆さんは期待もあるが不安のほうが大きかったのでしょう。そんな中で、日本語講座で学ぶ外国人、特に研究生や大学大学院生の方々が日本語で苦勞している様子が分かってきました。彼らには英語があれば日本語は不必要ではとも思いましたがその実態はどうなのだろうと有志ボランティアと勉強会を始めました。その時のメンバーが現在の活動を担っている方々でもあります。

—「日本語サポート会」のありかた—

2008 年～2012 年まで多い時には毎週、多忙な時は月 1 回と変則的ですが継続しました。日本語ボランティアに必要な理論的情報を習得すること、もう一つは、当時は情報が少なかった Can Do 方式に基づく学習者のニーズ調査を二つの柱として試行錯誤の繰り返しでしたが、大人の学びだとか、リカレント学習だとかそれなりに楽しんでた感もいなめません。その間、大学の先生方、大学院生、研究生の皆様からご指導やご意見をいただきました。特にそのころドクター生だった朴賢淑さんにはビジターとしてサポート会に出席してもらい貴重なアドバイスをいただいていた経緯があります。

この勉強会の「ありかた」のまとめとしては①大学院生が日本語で困るのは日本語による論文作成 ②生活習慣を知ることの 2 点に絞られたことを受け「サポート会」の心得が共有されてきました。

ありかた

その 1、論文作成サポーターはその内容には一切タッチしない。

文として成立していない部分の添削を主とする。

その 2、できるなら仙台の生活文化にふれてほしい。

ー「サポート会」のこれからー

準備期間もふくめると2011年には東日本大震災があり2022年の今年は新型コロナウイルスに怯える暮らしを余儀なくされていますが、論文添削サポートは無事終了しました。しかし教室風景は様変わりしました。2019年あたりから対面による添削指導はあやうくなり、徐々にオンライン化が進められていき、現在は教室に学生達の姿は見られません。教育学研究科のアディアニャム先生とエン先生が中心となり運営されていると聞いています。形はちがっても大学の研究者と市民ボランティアの協同による学生サポート活動は学都仙台にふさわしい社会のありかたを示したものと言えるのではないのでしょうか。今後はコロナ禍でできなかった生活習慣や文化にふれる機会が持てればと思っています。

最後に一言加えさせていただきますが、私は1962年教育学部教育社会学科を卒業しました。教えてくださった先生の「理論ばかり追いかけて実利ある学問をしないで。本学の精神は真理の探求ですけどね。」との言葉は忘れられません。その後長年が過ぎ、高橋満先生や朴さんに巡り合い、同じフィールドで一緒にすることができ、幸せを感じております。

「真理の探究と実学の精神」この言葉は現代の学生の皆さんにも伝えていきたいと思います。

阿曾 容子 氏

今年度もコロナの影響で、学生に対面しながらレポートや論文の添削をすることはできませんでした。対面の場合は、学生、大学院生がどのように考え、文を書き進めているのかを理解しながら添削することができます。ですが、用紙のみの添削は、書き手の意図が理解できているのか不安を感じながら、緊張しての添削です。毎回、自分自身の日本語力の乏しさ・語彙力の不足を痛感しておりますが、会の雰囲気、和やかさに救われております。

奥平 正子 氏

日本語サポート会の活動は、2014年10月の初回の打ち合わせ会を経て、翌月の11月14日（金曜日）から、日本語指導と日本文添削指導の形で始まりましたので、今年度で7年目の活動を終了したことになります。

今年もコロナウイルス対策の為、メールとオンライン上でパソコンを使っての間接的な方法での指導となりました。2022年1月には学生からの添削依頼が重なり、通常の日曜日だけでなく、二週目は2回（木、金）、四週目には3回（火、水、金）と活動致しました。

サポーターの方々は、他にも仕事や他の活動を兼ねていますので、事務局の私は「急な依頼では無理かな？」と思いながら、電話作戦を致しました。ところが「万障繰り合わせて」の言葉通り、ほぼ全員から協力する！！との返事を頂きました。この時、やっぱり現在のサポーターは最高！と感激致しました。

こんな折、先日の朝日新聞の記事で「団塊のノーブレス・オブリージュ」(noblesse oblige) というNPO組織の存在を知りました。編集者によると、日本の成長期に生まれ育ち、その受けた恩恵を、定年後も社会貢献で返したいという考えを基にしたとの解釈です。

私たちサポーターの大半は団塊の世代に該当致します。このフランス語は「高い身分に伴う義務」或

は「位高ければ徳高きを要す」という意味とのですが、私に感動を下さったサポーターの方々は社会貢献、或は東北大学を選んで来日した学生を助けたいという地域貢献の気持が強い方々なのだ！！と確信致しました。

出来れば、2022 年度も引き続き、現在のメンバーでの活動を続けて参りたいと願っております。

佐々木 市子 氏

この仕事で外国のことも知ることが出来ますし、今の大学生はこんな研究をしているのかと刺激を受けます。もう日本のことだけ知っていればいいという時代ではありませんし。

皆さんよく勉強しておられますが、日本人ならこんな書き方はしないなと気づくこともあるので、少しはお役に立てているのかなと思います。

ただ、変な文だと思ってもそれをうまく説明できないことがあるので、自分の勉強不足を感じ、自分も勉強しなくてはと思います。

今年もコロナで対面指導が出来ませんでした。直接お会いして雑談なども交えてお話しするのも楽しいので、来年こそコロナが収束するよう祈っています。

馬場 徐子 氏

今年もサポート会はメールやオンラインなど制限のある形となりました。

異国への夢や希望、勉学への意欲を抱いた若者がこのコロナ禍の 2 年間で制限のある環境で過ごさざるを得なかったことは実に気の毒でなりません。

けれどもこのようなマイナスの環境をはねのけるように、今年度は近年になく多くの学生から論文校正の依頼があったことは嬉しく思います。

母語以外の言語を身につける上でもこのパンデミックは間違いなく不利な状況だと思えますが、彼らの日本語のレベルは数年前に比べてもかなり高くなっていると感じます。

ただ、どの学生の場合も助詞の修正箇所が多く、日本人にとってと同様に、外国人にとっても助詞の適切な使用は難しいのだと改めて実感しています。正しい日本語に近づく上で私たちのサポートが少しでも貢献できたなら幸いと思います

コロナ禍が収束し、対面が可能となる日が一日も早いことを願うとともに、このような環境の中でも努力を続けている学生たちに心からエールを送りたいと思います。

米川 慎一 氏

今回もメールの送受信による日本語文の添削とオンラインでのやりとりの二本立てという形で行われました。この活動を通して気付かせられたことも多く、楽しい経験となりました。

中国在住の学生とのオンラインでの対話は初めてのことであり、興味深い体験でした。文章の添削作業を行なって感じたことは、助詞（特に は と が ）の間違いが多かったことです。個人の日本語を書く経験の差もあったようです。またそれは、特に長文の場合に顕著で、助詞の間違いにより分かりにく

い文章になっていることも多かった気がします。自動翻訳での下訳の影響もあるかもしれません。いずれにせよ、文章を書き、読むことで克服できることだと思われるので学生の皆さんには頑張っていたいただきたいです。

大久保 和雄 氏

毎週金曜日は、東北大まで往復2時間歩きます。日本語支援活動は、私にとって目的のある散歩ができるありがたい存在です。

日本語支援活動は、毎回いろんな発見があり、私自身の勉強になっています。先日も、「新冠肺炎」という表現があることを勉強しました。これは日本語としてそのままは使えないので添削の対象としましたが、添削すべきかどうか悩んでいる問題があります。それは句読点。読点をどこに打つかで、伝わり方が全く違ってきます。これは日本語の根幹にかかわる大事な問題でしょうが、私の悩みはそれ以前の単純な問題です。テン（,）にするか、カンマ（,）にするかという技術的問題です。先日添削した博士課程の論文は、さすがに、カンマ（,）ピリオド（.）で統一されていました。たぶん学術論文は、この方向に進んでいくのだらうと思います。しかし、今の日本の現状は、テン（,）とマル（。）が圧倒的に多いでしょう。新聞もそうです。教科書は、カンマ（,）とマル（。）になっています。文科省としては、カンマとマルの方向に国民を統制してゆきたいのだと思います（個人的感想です）。現役の教員だったころ、研修センターで修行してきた中間管理職から添削を受けたことがあります。テンをカンマに直されました。修行していない私は無視しましたが、さて、添削する立場の今の私はどうしたらいいのか。

縦書きから横書きへと移行する中で、テン・マルからカンマ・マル、そしてカンマ・ピリオドへと句読点の表記が変化するの自然の流れなのでしょう。上から統制すれば、そうなるのでしょうか。一度学生と話をしてみたいものです。

7. 学生からのコメント：日本語学習支援プログラムに参加して

今年度の日本語学習支援プログラムに参加した学生からもコメントをいただいた。感謝を申し上げたい。サポーター、学生、我々がこの報告書で提示した意見や課題を参考に、来年度の日本語学習支援事業をさらに改善していきたいと考える。

劉 雪芹（学部研究生）

本学期で色々な日本語学習についての支援をいただき、感謝をいたします。教育学研究科の日本語学習支援プログラムに参加することで私は大変助かりました！研究生として入学したばかりの時、色々わからないことがあって、特に日本語の使い方については悩んでいました。日本語学習支援プログラムに参加してみたところ、思ったより役に立ったと感じました。このことは私が研究生の生活に慣れる上で大切な要素の一つだと思います。

日本語学習支援プログラムでは、レポートや小論文、研究計画書など、文式が異なる文章でも添削をしていただけるので、たとえば毎回書き言葉についての疑問があれば、一週間ですぐ解明してくれるこ

とがとても素晴らしいと思います。そして、先生たちは皆さん細かいところまでも留意して添削してくださるところに感心しています。毎回エン先生やアディア先生に連絡する時、2人の先生はとも優しくて親切で、私が気になっている問題を気楽に言えるようになりました。

最後は少しご意見をさせていただきます。添削したものをスキャンして、PDFにしたら、よく見えなことがたまにあります。多分プリンターの調子のせいかと思います。また、これからの新しい日本語支援の形にも期待しております！今後もどんどん参加しようと思います。

よろしく願いいたします。

任 亦雷 (博士課程後期1年)

学生の任亦雷です。私は4年前、研究生だったころから大変お世話になりました。最初の院試勉強からつい最近までの論文提出、本当に日本語学習支援プログラムの先生たちの支えがなければここまで辿り着けなかったのではないかと思います。

コロナ禍後、オンラインでのやり取りとなり、助教の先生たちも仕事量が倍増した中にもかかわらず、いつも丁寧に対応してくださいました。学生にとって、文章を提出すれば直してくださる便利さがある一方で、やはり先生たちと直接お会いできない物足りなさも覚えたのかなと思います。またいつか対面で雑談しながら勉強できる日を待っています。

彭 雯靖 (学部研究生)

いつも丁寧に日本語の添削をしてくれてありがとうございます！大変助かっています。サポート会の先生たちは、文法が間違えたところを書き直すことだけではなく、なぜそのように書き直したのかについて詳しく教えてくださっています。また、オンラインでのやりとりも、いつも閔先生、アディア先生がそばにいたので、安心しています。

もしよろしければ、メールではなく、直接にウェブサイトで予約することができたら、もっと便利だと思います。

徐 静遠 (学部研究生)

日本語で文章を書いて、それを持って日本語学習支援プログラムに参加し、添削してもらえるので大変助かっています。日本語の文法や単語の使い方まで先生方が丁寧に間違いを直してくださいます。また、オンラインでのやりとりで、自分の日本語の会話能力を鍛えることができるので本当に感謝しています！